

27. 脱脂・脱灰の基礎的検討 -MILESTONE 社製 KOS の使用経験より-

○豊永安洋(帝京大学ちば総合医療センター病理部) 安達純世(同) 本間志保(同) 渡邊孝子(同) 鈴木学(同) 小山芳徳(同)

【目的】MILESTONE 社製 KOS を用いてマイクロウェーブ(以下 MW)を利用した脱脂・脱灰処理における処理時間の短縮、ブロック作成時のパラフィン浸透、及び、組織の染色性を検討した。

【方法】脱脂液にはメタノール+クロロホルムの等量混合液と JFC (Leica 社製)を用いた。庫内温度を 37 とし 30 分、1 時間、2 時間照射した。

脱灰液は EDTA2Na-NH₄OH と KCX(ファルマ社製)を用いた。庫内温度を 37 および 50 とし、20 分、2 時間、4 時間照射した。照射後、薄切具合、HE 染色に加えてギムザ染色の染色性、LCA による免疫染色を行った。

【結果】脱脂では MW 照射の短い 37、30 分でも薄切に支障はなく脱脂処理は良好であったが、いずれの照射時間においても HE 標本では脱脂不足による浸透不良が一部に見られた。脱灰では照射の影響の最も少ない 37、20 分でも薄切に支障はなく、脱灰は十分と考えられた。照射後の HE 染色では、KCX 処理では EDTA 処理に比べ全体的に好酸性を示す傾向が見られた。ギムザ染色、LCA の免疫染色では KCX 処理では良好な染色は得られず、EDTA 処理では染色性は比較的良好であった。

【考察】温度管理可能な MW 装置である KOS を用いることで、脱脂・脱灰の時間を短縮できたが、熱による変化は避けられない。脱灰においては目的に応じた脱灰液の適切な選択が重要である。

【結論】KOS は温度管理が可能で、組織構築を保ちながら脱脂・脱灰処理の時間を短縮できた。しかしながら KCX を用いた脱灰処理では、いずれの条件においても染色性の低下が見られた。

0436-62-1211 (内線 1263)

28. 膵管内乳頭粘液性腫瘍の 1 例

○田島秀昭 荒川文子 村田行則 石井幸雄 大貫經一 石田剛 (独立行政法人 国立国際医療研究センター 国府台病院 中央検査部)

【はじめに】膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)は、豊富な粘液産生のため膵管拡張を伴い、種々の程度の乳頭状増殖を認める腫瘍であり、組織像や粘液形質によりいくつかの亜型に分類されている。今回 IPMN の 1 例を経験したので、免疫組織学的特徴を中心に報告する。

【症例】50 歳代女性。約 2 年前から IPMN に経過観察。主膵管の拡張と急性膵炎の併発のため、膵体尾部脾切除術が施行された。

【細胞所見】粘液性背景に、細胞質に豊富な粘液を持つ小型の細胞が散在性から乳頭状集塊で認められ、集塊辺縁は規則的・直線的で、極性の乱れや重積性は僅かであった。核型不整は弱く、クロマチン増量も軽度であった。以上より、膵管内乳頭粘液性腺腫(IPMA)を推定した。

【組織所見】肉眼的には体部に 11mm 大までの粘液性嚢胞の集簇が認められ分枝型 IPMN と判断した。嚢胞の内面には粘液を有する円柱上皮の乳頭状増殖が見られ、軽度から中等度異型の IPMA が主体であったが、一部に核異型と核分裂像が目立つ領域を認め、非浸潤性膵管内乳頭粘液性腺癌(IPMC)の成分と考えられた。主膵管や分枝の嚢胞上皮のほとんどは MUC2(+), MUC5AC(+), MUC6(-)で intestinal type を示したが、一部に MUC2(-), MUC5AC(+), MUC6(+)の gastric type と考えられる部分を認めた。

【まとめ】IPMN は粘液形質により gastric type, intestinal type, pancreatobiliary type, oncocytic type の亜型に分類され、その頻度は gastric type と intestinal type が多い。また gastric type に比べて、intestinal type は悪性例が多く予後が悪いとされている。本例に於いても免疫染色を行い亜型の検索を行ったので若干の文献的知見を合わせ報告する。 連絡先：047-372-3501